

公共事業等の景観形成指針と色彩

6-1-1 公共事業等の景観形成と色彩

まちなみの景観は、公共的空間と私的空間によって構成されています。熊本らしい色彩景観を実現するためには、公共的空間を管理する行政と、私的空間を管理する県民が協力してこれに取り組む必要があります。

とりわけ、公共的空間は、人々の活動やふれあいが多く、地域の環境を形成するうえで極めて大きな役割を担っています。

公共事業等を実施する際には、地域の景観に配慮し、地域の顔として周辺を先導する優れた色彩設計を行う必要があります。

6-1-2 公共事業等の景観形成指針

熊本県景観条例では、公共事業に関しては届出を要しないこととしていますが、『公共事業等景観形成指針』を定め、国、県、市町村等はこれを遵守するよう求めています。

『公共事業等景観形成指針』では、施設別の景観形成指針を設けています。このうち、

- 1—道路(高架橋、歩道・自転車道、歩道橋)
- 2—橋りょう(本体、高欄・照明施設等)
- 3—河川(樋門)
- 4—港湾・漁港(建築物)
- 5—都市公園等(施設、建物)
- 6—公共建築物(建築物、門・扉、附帯施設)

などについて、色彩に関する指針を設けていますが、その主旨は、

「地域の特性をいかし、周辺景観との調和に配慮する」ことに集約することができます。

6-1-3 公共事業等の色彩設計にあたって

公共事業等の色彩設計における基本的な視点を、次の表に整理します。

■表 公共事業の色彩設計に求められる基本的な視点

視点	内容・主旨
一貫性 への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ○一過性の流行にとらわれない。 ○担当者が変わってもその主旨が継承されるよう色彩設計のプロセスと根拠を明らかにする。
公共性 への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ○色彩設計の考え方や過程を明らかにし、住民にその合理性を理解してもらい協力を得る。 ○住民の意見を取り入れ、民主的な手続きで設計を進める。
総合性 への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ○計画対象の位置づけや地域との関わりを総合的・相対的に考える。 ○個と全体のバランスを考える。 ○行政内部に協力・連携機構をつくる。

公共事業等の色彩設計プロセス

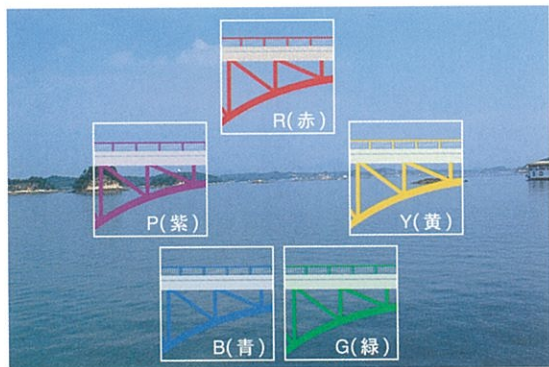
「表 公共事業の色彩設計に求められる基本的な視点」で整理したように、公共施設の色彩設計においては、そのプロセスが重要になります。ここでは、一般的な公共建築物の色彩設計の流れをフローチャートとして整理し、同時に各段階の内容や配慮事項などを例示します。

プロセス	内容・配慮事項	必要な資料・道具など	
調査	1 色彩ガイドラインの把握	対象が関わる地域・地区、行為の景観形成基準や色彩ガイドラインを把握します。	色彩景観ガイドライン 景観条例ハンドブック 景観条例パンフレットなど
	2 周辺の現況色彩の把握	色見本帳などを使って周辺の建物の色彩を調べます。同時に、周辺の景観の中で重要と思われるものの位置関係や色彩を把握します。	色票集、カメラ、記入表など (日本塗料工業会標準色見本帳等)
計画	3 色彩の方向性の検討	対象がその地域・地区のイメージ形成上どのような役割を担うかを明確にし、全体の色彩イメージを構成します。	色彩景観ガイドライン 対象の構想書・計画書など
	4 各種見本の入手	仕上げ表などに沿って各部の建材見本・色見本を取り寄せます。	対象の設計一般図・仕上げ表など
設計	5 各部の色彩の選択	色彩ガイドラインに沿って各部の色彩をリストアップします。建材の種類によっては色彩の特注が可能なものもあります。	対象の設計一般図・仕上げ表 各部の建材見本・色見本など
	6 配色案の作成	リストアップした色彩を組み合わせた配色案を作成します。着彩立面図やカラーパースなどを作成するとわかりやすい表現ができます。	着彩立面図、着彩平面図 カラーパースなど
	7 ガイドラインとの整合性の検討	色彩ガイドラインとの整合性を再確認します。景観形成上重要な位置にあり、地域のランドマークとなるような公共性の高い建物は、積極的に色彩ガイドラインの範囲外の色彩を使って周辺と対比させることも考えられますが、そのような場合は、この段階で住民の合意を得ることが必要です。	色彩景観ガイドライン 着彩立面図、着彩平面図、 カラーパースなど
	8 色彩設計図書の作成	確定した色彩設計案に沿って、平面図や立面図、仕上げ表などに色彩を記入し、色彩設計図書を作成します。	対象の設計一般図・仕上げ表 色彩設計図書など
監理	9 色彩設計監理	設計図書の色彩が施工に反映されているかチェックします。 必要に応じて追加や修正を行います。	色彩設計図書 施工図など
維持管理	10 維持管理	建物の完成後は、美観が保たれるよう、その維持・管理につとめます。	維持管理計画書など

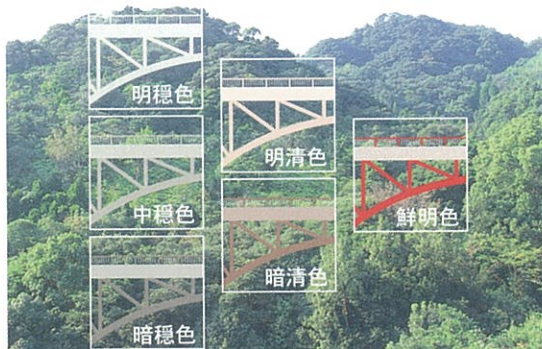
図 公共建築物の色彩設計の流れ

公共事業の色彩設計事例

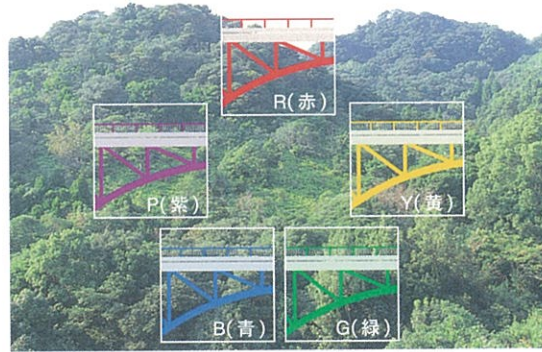
ここでは、『公共事業等景観形成指針』によって、特段の配慮が求められている、橋りょうを例にとって色彩設計の考え方を解説します。



■図 背景となる景観と橋りょうの色相—海浜部



■図 背景となる景観と橋りょうのトーン



■図 背景となる景観と橋りょうの色相—山間部

山間部ではやや暗めの基調色

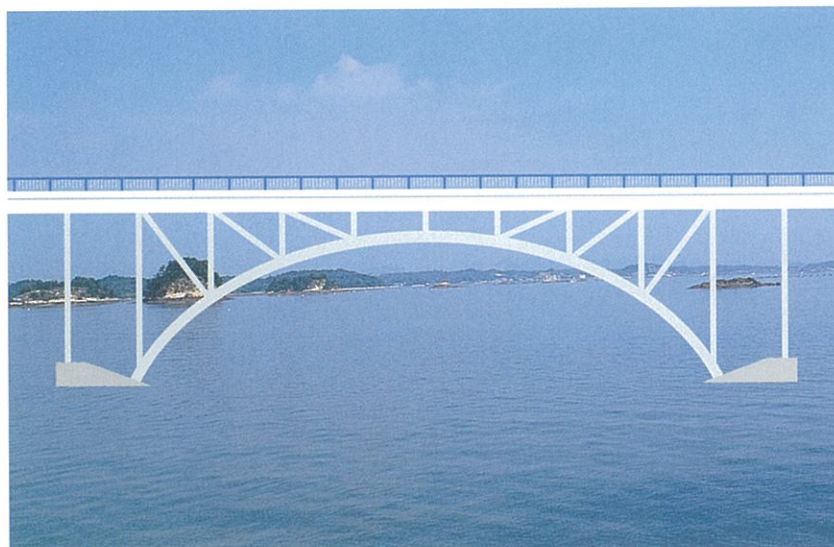
山間部の色彩設計例では、アーチ橋の主構部や垂直材、斜材などに、G(緑)系色相の暗穏色を用い、全体をやや暗めに抑えて、背景との融和を図っています。また、背景と融和させながらも、存在感や軽快感のあるデザインとすることを意図し、桁の色彩は主構部よりもやや明るい中穏色にしています。



■図 山間部に架設される橋りょうの色彩設計例

海浜部では明るめの基調色

海浜部の色彩設計例では、B(青)系色相の明穏色を中心とした明るめの色彩によって、さわやかさと軽快感のあるデザインにまとめています。日差しの強い熊本の海浜部では、塗料が退色しやすいので、高欄などメンテナンスが容易な部分を除いては、退色の影響を受けにくい低彩度色でまとめることが基本といえます。



■図 海浜部に架設される橋りょうの色彩設計例

●トーンの設定

背景よりも低彩度が基本
鮮やかさを抑えた明穏色や中穏色、暗穏色などのトーンを基調にすると、背景との対比が小さくなり、環境融和型の色彩設計になります。逆に、鮮明色を基調にすると周辺環境とは対比的な色彩設計になります。橋りょうの色彩は背景と同等か、それ以下の鮮やかさであることが基本です。鮮やかな色彩は、特別な象徴性をもたせるときなどに限って使用するようにします。

●色相の設定

背景の色相とあわせるのが基本
空や海が背景となる海浜部ではB(青)系、樹林や山はだが背景となる山間部ではG(緑)系が、背景となじみやすい色相といえます。ただし、全体のトーンが抑えられていれば、色相の違いはそれほど強く意識されなくて良いでしょう。

色彩に配慮した公共建築物

●地域の景観形成を先導する公共建築物

公共建築物は、地域の顔として周辺の民間事業を牽引するようなものでなければなりません。色彩設計にあたっては、地域の特性を十分に把握するとともに、地域の景観を今後どのように誘導するかという明確な方針を打ち出すことが必要です。

さらに、色彩ばかりでなく地域の素材や工法などにも理解を深め、それを積極的に活用していくことで地域の活性化を図っていくことも必要といえます。



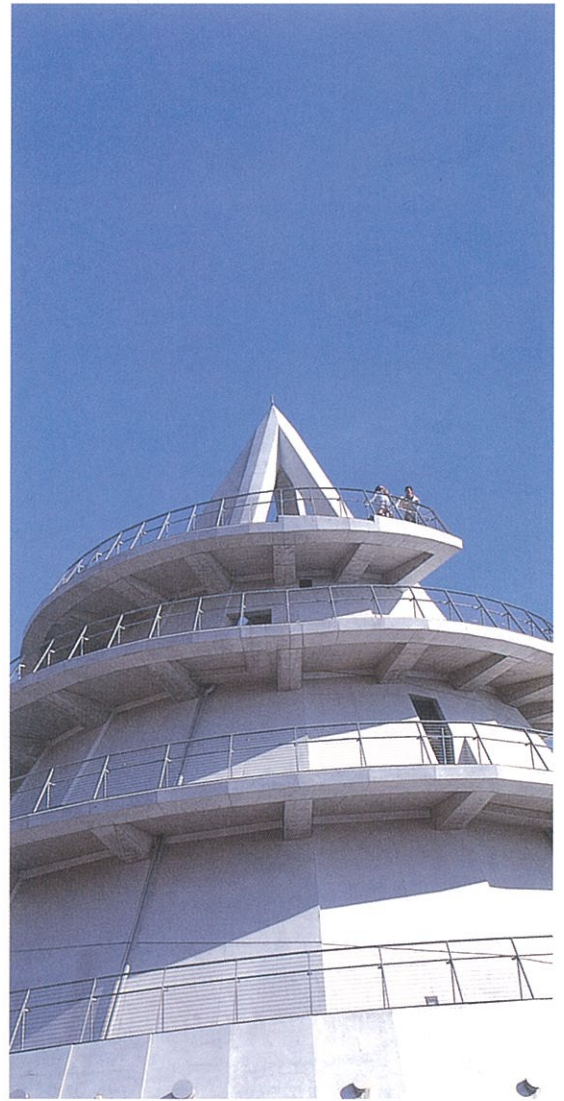
1

●1—熊本県庁は、YR(黄赤)系やY(黄)系の基調色相をもつ熊本市街の色彩環境を的確に把握して、暖色系の明穏色や中穏色などでまとめられています。周辺に散見される、やや彩度の高い色彩の建物に対して、熊本市街での色彩のあり方を発信しています。

●2—宇城市・三角港フェリーターミナルは海辺の明るい色彩環境に映える、コンクリート打ち放しウレタン塗装仕上げで外観を構成しています。シンプルな配色によって、螺旋形の特徴的な形態もつ象徴性が高められています。

●3—八代市・石匠館は地元の石材を外装材に利用し、周辺の自然環境との同化を図っています。地域の素材を積極的に活用することで、色彩ばかりでなく、素材の面でも地域の景観をつくる新しい建築物のあり方を示しているといえます。

3



2

